

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 1 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2011～2014

課題番号：23251021

研究課題名(和文) 太平洋島嶼部におけるマイノリティと主流社会の共存に関する人類学的研究

研究課題名(英文) Coexistence and Categorical Vagueness: Anthropological Studies of Minorities in the Pacific Islands

研究代表者

風間 計博 (KAZAMA, KAZUHIRO)

京都大学・人間・環境学研究科(研究院)・教授

研究者番号：70323219

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 26,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、太平洋島嶼部におけるマイノリティと主流社会との共存の論理を追究する。一般に、近代性の侵蝕によって不可視の差異が顕在化し、個別のマイノリティはカテゴリー化される。有標化された差異は、人間存在を一元的に規定して抑圧を生む。ただし太平洋島嶼部では、グローバリゼーションのなかにあっても、在地論理は再編されつつ存続してきた。反復される社会交換や通婚、事物の共有が、自他の境界線を常に曖昧化させる。カテゴリーの不明瞭さは多重帰属や複合的な人間観を再生産し、人々による属性の組み替えが可能となる。太平洋島嶼部における曖昧性の卓越は、属性の一義的な固定化を回避させ、緩やかな共存可能性を拓くのである。

研究成果の概要(英文)：This research project discusses how minority people endure difficulties and clarifies the local modalities of coexistence in Pacific Islands. The minorities are, in varying degrees, deprived of some rights in the modern world. The various kinds of differences, however, have rarely led to exclusion in the Pacific. A comparison of the Western and Pacific Island notions of personhood reveals that the former, characterized by sharp and constant boundaries, is inflexible, while the latter is characterized by variations and ambiguity, which allows a person to simultaneously belong to multiple categories. Through the reiterative practices of social exchanges and inter-marriages, the boundaries between categories have continued to blur, and therefore, the Pacific Islanders' idea of personhood has gained an elastic character. It is this vagueness in categories that prevents the exclusion of the minorities and enables the coexistence of the various categories of people in the Pacific societies

研究分野：文化人類学

キーワード：マイノリティ 共存 移民 先住民 ジェンダー 障害者 高齢者 太平洋島嶼部

### 1. 研究開始当初の背景

1990年代以降、各地で勃発したいわゆる「民族紛争」が、本研究の原点としてある。隣人どうしが突如、敵対して殺し合った、旧ユーゴスラビアやルワンダの惨劇に戦慄を覚えた人は少なからずいるに違いない。そして殺戮劇は、形を変えながらも今日まで延々と継続してきた。

この惨状を見れば、人間の残虐性は、個人的性癖に帰することはできず、誰もが潜在的にもつと考えるしかないのだろう。また人間は、些細な差異を見出して自他を集合的に区分し、他者集団を暴力的に排斥することによってのみ、自己存在を確定させると認めざるをえないのかもしれない。

本研究の対象である太平洋島嶼部では、2000年代前半に他者の排斥を伴う暴動や政治的混乱が起こった。トンガやフィジーでは華人やインド系商店の略奪や放火、ソロモン諸島では武装集団による殺人を伴う抗争が勃発した。これらは、グローバリゼーションによりもたらされた島嶼国経済の危機および国内統治の脆弱性に起因するという見方が可能である。

しかしながら、当該地域では、性質をやや異にするブーゲンヴィル紛争を除けば、アフリカや旧ユーゴスラビアのような凄惨を極める大量虐殺という事態には至らなかった。

太平洋島嶼部では、軍を有する国家さえ少なく、住民の間に火器が普及していないという状況が、直接的要因として重要であると考えることができる。確かに19世紀太平洋島嶼部各地において、マスケット銃等を用いた血腥い殺戮を伴う内乱が見られた。ただし、火器が不在であっても、残虐な集団的暴力行為が行われる可能性は、十分に残されているだろう。

ここで、2000年代以降の太平洋島嶼部における大半の国や地域では、規模や内実の異なる多様な集団間で差別や同化圧力はあるにせよ、平穏な状態が乱れる気配さえなかった点に着目したい。

太平洋島嶼部諸社会では、他者との軋轢と宥和、敵対と友好等、一見、矛盾する傾向が併存している。そうしたなか、キリスト教の受容と植民地支配を経て現在に至る歴史過程において、自他の関係を構築し、徹底的な排他性を制御する、固有の共存論理や人間観が形成されてきた可能性を追究することはできないだろうか。

### 2. 研究の目的

この問いに接近するには、太平洋島嶼部における主流社会とマイノリティとの日常的な関係を見据える視角が有効である。いかにマイノリティが形成されて他者化され、排除の対象となりうるのか。逆に、集団的な自己が他者を取り込んでいくのか。あるいは、両者の差異と共存状態が維持されるのか。

ここで、主流社会とマイノリティとの共存

可能性は、西欧近代的論理によって必ずしも十分に理解できないことが重要である。政治哲学を含む西欧近代的論理への依拠は、西欧中心的な知的支配への従属に直結する。

この危険性を回避するには、太平洋島嶼部の在地論理について、西欧近代的論理への単純な反発や対抗文化の形成として解釈するのではなく、それをずらして組み替え、乗り越える代替論理として追究する必要がある。

本研究の作業過程では、太平洋島嶼部における民族誌資料に基づく個別の議論により、西欧近代の枠には収まらない、在地の論理に拘り続ける必要がある。そこで本研究では、実地調査資料に基づき、広く太平洋島嶼部における主流社会とマイノリティとの共存のあり方を日常生活の次元から検討する。

太平洋島嶼部社会は比較的平穏だが、必ずしも、多様な集団が差異を縮減させて容易に融和が進んできたわけではない。グローバリゼーションの進行するなかであって、集団的衝突の深刻化を抑え、ある程度の共存維持を可能にする、太平洋島嶼部に特徴的な論理を検討することが、本研究の目的である。

### 3. 研究の方法

本研究は、太平洋島嶼部における多様なマイノリティの形成および主流社会との共存のあり方を追究し、その特徴を明確化する。そのため、研究分担者がそれぞれ、ポリネシア・メラネシア・ミクロネシアの個別地域について集中的に実地調査を行い、基礎的な文書資料の収集はもとより、日常生活に密着した民族誌資料を蓄積し、分析・考察する。

各自が収集資料を分析し、文献研究から抽出した理論的枠組みを用いて考察を加える。さらに、毎年度、研究会を開催して相互に批評し合い、議論を精緻化していく。

マイノリティのもつ特徴や歴史的経緯に対応して、(1) 移民マイノリティ：フィジーにおけるヴァヌアツ系移民[丹羽]およびキリバス系移民[風間]、ヤップ離島出身の移民[柄木田]、パプアニューギニアおよびフィジーの華人[市川]、パラオの沖縄系移民の子孫[飯高]、(2) 先住民：都市在住ニュージーランド・マオリ[深山]、(3) 性・身体：仏領ポリネシアの性的マイノリティ[桑原]、サモアの聴覚障害者[倉田]、(4) 女性・高齢者：ペラウ(パラオ)女性会議[安井]、ヴァヌアツの高齢者と観光開発[福井]の4つに研究対象群を分ける。

(1) は、移民マイノリティとして土地権をもたずに主流社会から排除され、下位に留め置かれる人びと、(2) は、ヨーロッパ人の入植者によって土地を奪われてきた先住民、(3) は、偏見をもたれうる身体障害や性的嗜好により他者化され、周辺化されてきた人びと、(4) は、主流社会を構成しながらも、ヘゲモニー集団から差異化されうる人びとである。

とりあげる対象は、いずれも不分明な自他

の境界領域において生起する、現代の太平洋島嶼部における諸事象である。多様な移民や先住民の連携と分離、混血性をめぐる言説や実践、女性組織の活動、障害の生成、性的少数者の出現、開発と高齢者等、幅広い事象が議論の俎上に載せられる。

そして、単なる理念的な宥和ではなく、西欧近代の論理とは異質な光を放つ共存と自己弁別の在地論理が抽出されることになる。

#### 4. 研究成果

##### (1) 移民マイノリティ

フィジーのヴァヌアツ系住民：フィジーは多民族国家と言われる。統計上、明示されるエスニック集団として、先住民(i Taukei)に分類されるフィジー系(メラネシア系)およびロトゥマ系(ポリネシア系)、契約労働者の子孫であるインド系住民がいる。しかし、それ以外にも、統計で明示されないエスニック・マイノリティがいる。

まず、ブラックバーディング等により、プランテーション労働者として19世紀に渡航したメラネシア系(ソロモン系・ヴァヌアツ系)の住民があげられる。ときにメディアや選挙キャンペーンで言及されるが、そもそも形質的特徴が共通するフィジー系住民との間に、外見上の区別をつけることは困難である。まさに不可視化した移民である。

一般に、メラネシア系住民といえば、ソロモン系住民(Ni Solomoni)が想起される。一方、これまでほとんど検討されてこなかったヴァヌアツ系住民は、移住3~4世代目にあたる。ヴァヌアツ系住民は、出身島を基準として小集団を形成している。出自の知識は世代を超えて伝えられており、近年、草の根レベルでヴァヌアツ本国との交流が図られるようになった。

ヴァヌアツ系住民が本国に里帰りし、訪問団の年配男性が、儀礼的に首長タイトルを付与されるという興味深い事例が観察された。ヴァヌアツ系住民は、フィジー語話者であり、ヴァヌアツの言語文化についてほとんど知らない。彼らは、フィジー国民を自認しながらも、新たにヴァヌアツ系の出自を再確認する動きを見せていることが明示された。

フィジーのキリバス系住民：形質的にミクロネシア人であるキリバス系住民は、フィジー首都近郊に居住している。人びとの始祖は、19世紀から20世紀前半に、ブラックバーディングや労働契約により、キリバスからフィジーに渡航してきた。主に、プランテーションでコブラ生産に従事していた。

現在の首都近郊における居住地は、フリーホールド地やリース地である。ヴェイサリ地区のキリバス系住民を見ると、ソロモン系・ヴァヌアツ系とは異なり、いわゆるフィジー系フィジー人以外との通婚関係が、頻繁に築かれてきたという特徴がある。

あるキリバス系の家族を例にとると、人びとの配偶者は、海外からの移民が占めている。

キリバス語を母語とするバナバ人、中国人、ポリネシア系のツヴァル人等である。また、先住民を配偶者とする場合でも、ポリネシア系のロトゥマ人や、地理的・言語的にトンガに近いと言われるラウ諸島出身者との通婚が見られる。

かつて、現金経済へのアクセスが比較的容易であった国内外の移民が配偶者として選好された可能性がある。また、形質的にキリバス人に近似する人びとを配偶者に選んだと推定できる。しかし、今日、土地持ちのフィジー系住民が、社会的に優位に立つなか、キリバス系住民は周辺化されている。

一方、多様な系譜に沿った移動が見られ、キリバス系住民の居住地を結節点とした、トランスナショナルなネットワークが作動し、エスニックに名づけようのない「パシフィック人」が形成されていることが明らかになった。

太平洋島嶼部の華人：華人は、太平洋島嶼部に広く居住している。相貌が明らかに異なるため、華人の存在は目につきやすい。

パプアニューギニアのニューアイルランド島では、現地の人びとと華人は姻戚関係を築き、ニューギニア人姻族を商店の用心棒として雇用し、現地にうまく順応しながら商売を行っている。ただし、通婚により現地住民と混じりあいながらも、狭い血族の範囲で一線を画し、少数の近親者が寄り添って生活している。

他方、フィジーの華人に特徴的なのは、商店経営のみならず、畑地をリース契約によって借り受け、都市近郊型の農園を営む点である。農園では、労働者としてフィジー系住民を雇用している。農作物は、都市の市場で売って現金を得ている。

ニューギニアやフィジーの都市部では、華人の人口が増加するにつれ、華人向けの商売が成立するようになった。華人学校も設立されている。太平洋島嶼部における援助や開発を通じた中国国家の進出が国際政治の舞台で話題となる一方、現地人との微妙な距離をとりながら、華人は都市部に定着し、ときに排斥を受けながらもしぶとく生活を維持していることが明示された。

パラオの沖縄系移民：太平洋島嶼部における東アジア系移民のなかで、日系人の存在は、日本の旧国連委任統治領であったミクロネシア地域において顕著に見出だせる。かつて、とくに沖縄から数多くの移民がパラオ等の南洋群島に植民していた。

戦後、南洋群島から日本への帰還者が「パラオ会」等の団体を結成し、現地訪問、慰霊碑建立、慰霊祭開催等の活動を継続してきた。ただし、植民の直接的な生活経験をもつ世代が減るにつれ、活動は縮小化傾向にある。

パラオには、沖縄を含む日系人が居住しており、日本側の帰還者との交流が盛んに行われてきた。しかし、南洋群島時代を生きた世代は、パラオでも減少しており、交流活動の

現地での認知度は必ずしも高くない。

かつて、沖縄出身者は、本土出身の日本人よりも現地の人びとに近接して生活を営み、植民者/被植民者という二分法に収まらない関係が築かれていた。そのため、戦争犠牲者や現地で死亡した祖先の慰霊といったナショナルな次元に留まることのない、沖縄とパラオとの緊密な関係を見出すことができる。

戦後、沖縄で再移住運動が起こったという事実を鑑みても、「植民地的郷愁」が色濃く看取されることが明らかになった。

ヤップ離島出身者：ミクロネシア・カロリン諸島では、かつてヤップ本島の一部地区を最上位として、離島から貢納を行うサウエイ交易が行われていた。しかし、交易は、アルカイアがモデル化した直線的な図式で捉えられるものではなく、より込み入ったネットワークとして把握した方が適当である。

交易自体は消滅して久しいが、ヤップ主島とオレイ環礁など離島との主従的なサウエイ関係は、現在でも見られる。ヤップ本島と離島との明確な区分が認識されており、本島の首長会議と並立して、離島首長会議が運営されている。離島首長会議の開催時には、交易パートナー（本島の首長）への貴重品の贈与が行われてきた。

ヤップ本島内に離島出身者は土地をもたず差別的扱いを受けるが、交易パートナーから土地利用の便宜を受けることができる。離島出身者死亡時に、交易パートナーの土地に埋葬される事例や居住地確保の便宜供与の事例が見出される。

一方、離島出身者は、島を超えた連帯組織（Pangar Remitaw Organization [全海人組織]）を結成している。こうした互助組織は、離島に関連する多様な情報交換等を行う。また、グアム島への出稼ぎ者の間でも互助が見られ、客死した者の遺体をヤップ本島に移送するために、協力して献金を行っている。

このように、ヤップ離島出身者は、必要に応じて、旧来の主従関係を利用している。同時に、新たな組織を立ち上げ、ヤップ本島やグアム島等の移住地において、政治経済的連携を図っている。離島出身者という、いわば新たにエスニックな独自性を創出しながら主流社会と共存している。ヤップ離島出身者は、旧来の枠組みと新たな組織化によって、変動する社会経済状況に対応する戦略を編み出していることが明らかになった。

## （2）先住民

都市居住マオリの「混血性」：アオテアロア・ニュージーランドのマオリは、往々にして一枚岩的に論じられがちである。しかしながら実際には、他のエスニック集団との通婚関係が繰り返されてきた。

19世紀時点において、マオリはいずれ消滅する「死にゆく人種」と見なされていた。1960年代には、ヨーロッパ系住民の3.6%がマオリと、マオリの42%がヨーロッパ系住民と婚

姻関係を結んでいる。他方、同年代に、クック諸島等、ポリネシアを主とした太平洋島嶼部からの移民が増加し、マオリとの通婚が頻発化した。ヨーロッパ人との初期接触以降、マオリの「混血」化は進んできた。

しかしながら、外部者との通婚の繰り返しによって、マオリの「血」が単純に薄まるわけではない。工場地帯とされる南オークランドにおいて、複数のエスニシティに帰属する若者への面談調査結果を見ると、とくにマオリの「血」を強調する語りが見られた。

例えば、ある女性は、マオリ・ヨーロッパ・トンガ・サモアの系譜をたどれるが、マオリとして自己規定していた。ただし、相貌においてマオリらしからぬ者は、状況に応じて態度を変え、「面倒を避けるために」、マオリであることを自己主張しない場合も見られる。

ニュージーランドにおいては、主流のヨーロッパ系とマオリが対峙する二分法の図式が、あらゆる場面において強調され、そこでは、他のエスニシティが省かれる傾向が認められる。また、相互扶助的なマオリの生活が強調されており、マオリ・コミュニティの成員であることが、マイノリティとして現実に生活を維持するうえで重要である。「混血」が進行しながらも、マオリが消滅することは決してなく、マオリとしての自己認識は、常に再生産されていることが明示された。

## （3）性・身体

仏領ポリネシアの性的少数者：ソシエテ諸島タヒチ社会において、近代化やグローバル化により、多様な性自認や性的指向性は、一元的な性的マイノリティ・カテゴリーとして括られるようになっていく。

タヒチには、西欧接触以前から、伝統的なトランスジェンダーであるマフ（*mahu*）がいた。マフは、家事・育児・ゴザ編み・タバ作り等、女性の仕事を女性とともにやってきた。一方、1960年にタヒチ島でファアア空港が開港して以降、フランス軍関係者や観光客が大挙して押し寄せるようになり、ラエラエ（*raerae*）とよばれる新たなトランスジェンダーが出現してきた。

ラエラエの多くは、より女性性を強調し、ホルモン剤投与や外科的手術等の医療処置により、身体的にも女性化している。ただし実際には、マフ/ラエラエ間の明確な弁別は困難であり、認識のあり方に地方差（タヒチとボラボラ等）が見られる。概ねラエラエのほうが、よりグローバルなトランスジェンダー像に近似している。

さらに言えば、異性愛的なマフやラエラエとは異なる、同性愛者の存在も認められる。しかし、同性愛者は、固有にカテゴリー化されることなく、不可視の存在としてマフやラエラエ以上にマイノリティ化している。

グローバル化の進行するなか、トランスジェンダーを含む多様な性のあり方は、部分的に西欧化し、新たな性マイノリテ

ィが生成していることが明らかになった。

サモアの障害者：他の太平洋島嶼国と同様、西ポリネシアのサモアへのオーストラリア等による開発援助は、脆弱な国家経済を維持するために不可欠である。ただし、開発援助には、国連指針に基づく基準が設けられている。被援助国の要望を単純に受け入れるのではなく、援助する側の価値判断や概念が一方向的に押し付けられることになる。

オーストラリアからサモアへの援助のうち、教育関連費目が、総額の30%を占めている。そこに、障害者教育を担う人材養成の奨学金も含まれている。援助に伴い、障害（disability）を前提とした障害者の人権保護や自立といった理念が、当然のものとしてサモアに導入されている。しかし元来、英語の健常/障害に対応する、サモア語の概念や語彙はなかった。

サモアの障害者支援 NGO は、援助資金によって巡回を行い、各地で障害者を「発見」している。障害者に対してさまざまな計測を行い、障害は数値化されて記録される。西欧的な基準に則って、障害の種類や程度が分類され、障害概念が作りあげられ、新たな支援対象とされていく。

健常者と障害者の共存それ自体が、西欧のヘゲモニーに則った政治経済と概念導入によって生成された、新たな植民地的産物であるという状況が明示された。

#### (4) 女性・高齢者

ベラウ（パラオ）女性会議：母系社会のパラオでは、植民地期から1994年の独立を経た社会変化のなか、ジェンダー関係が再編されてきた。なかでも、1995年に北京で開催された世界女性会議への参加を目指したベラウ女性会議の発足は、大きな意義をもつ。

ここで、ベラウ女性会議の結成には、いわゆる伝統的な称号保持者である女性首長2人が主導している点を看過するべきではない。つまり、西欧近代的な人間観の下にある女性の自立と自由に向けた運動というよりも、旧来の価値観に基づくリーダーシップにより、女性会議は発足したのである。

議論される問題は、日常生活に関わり多岐にわたっている。主に、パラオのシューカン（日本語の「習慣」由来のパラオ語）を保持する具体案の提示、青少年の犯罪防止や治安の維持、基本的人権を遵守した市民生活の実現等に大別される。ジェンダー間の不平等の是正が問題化されるわけではなく、一般的な社会問題である。

ベラウ女性会議の議論は、フェミニズムのもつラディカルなジェンダー批判を含まず、むしろ守旧的であり、男性首長と対立することもない。都市部の女性たちは、女性会議に対して無関心であり、むしろ会議を主導する女性首長に対して不満を述べる。いわば、女性会議は、男性首長と相補的な伝統的な権威を保持し、多くの女性たちを統合している。

それとは距離を置く、都市の女性たちが、むしろマイノリティ化される兆しを見いだすことができる。

パラオでは、グローバル化のなかで、伝統的首長制が再編されながらも保持されており、西欧的なフェミニズムの論理を換骨奪胎して女性会議が運営されている。そこにこそ、マイノリティ化した近代的女性の生成が浮かび上がるのである。

ヴァヌアツの高齢者と開発：太平洋島嶼部では、一般に男性の年配者は、社会的あるいは霊的に権威をもつ存在とされてきた。しかし、開発と現金経済化が進行するなかで、主流社会を構成する男性年配者が、逆に疎外される可能性が生じている。

近年、ヴァヌアツのアネイチム島にオーストラリアの大型客船が頻繁に寄港するようになった。島民人口900人に対し、一度に2000人もの観光客が押し寄せている。そこでは、さまざまなアトラクションが企画され、土産物屋が林立し、警備員や清掃員の雇用が生まれている。

新たに生じた経済セクターに順応するには、オーストラリア人との対話を行う英語力や、計算力・経営力が必要となる。年配者たちは、そうしたスキルを持ち合わせることなく、村落部に留まっている。

観光業の発展により大量の現金が流入し、従来とは異なる消費生活が生まれてきた。自家生産・自家消費していたカヴァさえも、現金による取引対象となった。同時に、村落における畑作等の生業活動が疎かになり、年配者たちは不満を述べるようになった。

年配者の政治経済的な権威は凋落しつつあり、経済的な生産に寄与しない近代的な弱者としての側面が立ち現れてきた。しかし同時に、従来の共有理念（akro）は保持されており、年配者たちも観光開発の恩恵を受け、疎外される状況には至っていない。

太平洋島嶼部におけるマイノリティと主流社会の多様な関係のあり方を見ると、グローバル化のなかであって、従来、社会内部に埋め込まれていた人びとが、近代的概念の侵蝕と社会経済変化によって有標化され、マイノリティ化する事例が見られる。

ただし、西欧近代的な論理の単純な卓越によって形成される、マイノリティ化の事例は稀である。むしろ、太平洋島嶼部の観念が再編されながら、しぶとく存続している。ここでは、在地の多重な帰属の仕方や人格理念、サブスタンス共有や交換により、自他や敵味方を弁別する境界線が曖昧化されている。

近代的な自他の弁別様式は変形され、状況に応じて属性を適宜組み替えていく、いわば非決定的な柔軟性が色濃く見いだせる。境界線の曖昧化を含む在地論理が、近代性の内包する自他の峻別と過度な排他を抑制している可能性を指摘することが可能である。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計6件)

飯高伸五 パラオ諸島における日本統治期の鉱山採掘跡の現在 補償請求と観光活用の狭間で『太平洋諸島研究』2: 1-19, 2014 査読有

柄木田康之 表敬行動、贈与交換とオレアイ環礁の父子 『宇都宮大学国際学部論集』39: 49-59, 2013 査読有

福井栄二郎 名の示すもの ヴァヌアツ・アネイチウム社会における歴史・土地・個人名 『文化人類学』77: 203-229, 2012 査読有  
風間計博 中部太平洋バナバ島における燐鉱石採掘への抵抗と敗北 『歴史人類』40: 1-26, 2012 査読無

市川 哲 帰郷から観光へ パプアニューギニア華人の訪中経験の変容過程 *Journal of Asian Studies for Intellectual Collaboration* 1: 148-161, 2011 査読無

litaka, Shingo Conflicting Discourses on Colonial Assimilation: A Palauan Cultural Tour to Japan 1915. *Pacific Asia Inquiry* 2: 85-102, 2011 査読有

[学会発表](計9件)

市川哲・飯高伸五・深山直子 (ミニシンポジウム) オセアニアにおける「インターマリッジ」の現代的諸相 マジョリティとマイノリティの観点から 日本オセアニア学会関東地区例会 2014年12月13日 立教大学

litaka, Shingo Mining, Bombing, and Touring: Dark Tourism and War Memory in Palau. Pacific History Association, 21st Biennial Conference 2014 2014年12月3日 国立臺灣大學

倉田 誠 圏としての「障害者」- サモア社会における障害者支援 NGO ロト・タウマファイの活動から 日本文化人類学会第48回研究大会 2014年5月17日 幕張メッセ

Yasui, Manami The Glocalization of Childbirth in Japan and Palau. International Union of Anthropological and Ethnological Sciences 2014年5月15日-5月18日 幕張メッセ

丹羽典生 辺境からみるグローバル化: フィジー・ヴァヌアツ移民の位置性と戦略 日本オセアニア学会第31回研究大会 2014年3月22日 高知県民宿舎桂浜荘

Karakita, Yasuyuki Deterritorialized funeral fund-raising as subaltern public sphere activities: A case of FSM migrants in Guam. The 17th World Congress of the International Union of Anthropological and Ethnological Sciences 2013年8月5日-8月10日 Manchester University

風間計博 バナバ人とは誰か 強制移住の記憶と怒りの集合的表出 京都人類学研究会 2013年6月25日 京都大学

倉田 誠 「障害の文化」は生まれるか? サモアにおける障害者福祉活動の展開か

ら 日本オセアニア学会第29回研究大会 2012年3月25日 倉敷市芸文館

Ichikawa, Tetsu Ancestral Homeland and Their Own Homeland. The Association for Asian Studies and the International Convention for Asia Scholars 2011年4月1日 Hawaii Convention Center

[図書](計4件)

Kuwahara, Makiko, et al., Niko Besnier & Kalissa Alexeyeff (eds.) *Gender on the Edge: Transgender, Gay and Other Pacific Islanders*. University of Hong Kong Press 2014 378pp.

柄木田康之・風間計博・市川哲・安井眞奈美・倉田誠・福井栄二郎ほか(著) 須藤健一(編)『グローカリゼーションとオセアニアの人類学』風響社 2012 341ページ

柄木田康之・須藤健一(編)『オセアニアと公共圏』昭和堂 2012 275ページ

風間計博ほか3名(編)『共在の論理と倫理 家族・民・まなざしの人類学』はる書房 2012 463ページ

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

京都大学大学院 人間・環境学研究科  
教授 風間 計博 (KAZAMA KAZUHIRO)  
研究者番号: 70323219

### (2) 研究分担者

宇都宮大学 国際学部 教授  
柄木田 康之 (KARAKITA YASUYUKI)  
研究者番号: 80204650  
天理大学 文学部 教授  
安井 眞奈美 (YASUI MANAMI)  
研究者番号: 40309513  
金城学院大学 文学部 准教授  
桑原 牧子 (KUWAHARA MAKIKO)  
研究者番号: 20454332  
島根大学 法文学部 准教授  
福井 栄二郎 (FUKUI EIJIRO)  
研究者番号: 10533284  
国立民族学博物館 研究戦略センター  
准教授 丹羽 典生 (NIWA NORIO)  
研究者番号: 60510146  
東京経済大学 コミュニケーション学部  
准教授 深山 直子 (FUKAYAMA NAOKO)  
研究者番号: 90588451  
高知県立大学 文化学部 講師  
飯高 伸五 (IITAKA SHINGO)  
研究者番号: 10612567  
東京医科大学 医学部 講師  
倉田 誠 (KURATA MAKOTO)  
研究者番号: 30585344  
立教大学 観光学部 助教  
市川 哲 (ICHIKAWA TETSU)  
研究者番号: 40435540